

はやとうり

ウリ科：熱帯アメリカ

栽培暦

月旬	3			4			5			6			7			8			9			10			11					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
主な作業	○ 播種			● 定植			マールチ除去・敷きわら			追肥			追肥			開花始め			収穫始め			防霜対策			後始末			種子用貯蔵		

■栽培のポイント

1. 高温を好むので、定植初期は温度を高めにするよう管理する。
2. 秋の彼岸頃から開花を始めるので、それまでに十分生育させる。
3. 霜には極めて弱いので、防霜対策（ハウスなど）をとる。

■品種 白色種と緑色種があり多くの変異があるが、白色種はやや小さく、青臭みが少ないので塩づけやぬかづけに用いられ、緑色種は大型であるが、青臭いのでかすづけ、味噌づけに用いられる。

■育苗 実生その他挿し木も利用されているが、実生が一般的である。

播種 種子は果実から取り出すと発芽能力がなくなるので、取りださずにそのまま利用する。また、貯蔵している間に発芽している場合も多い。花落ち部から発芽するのでポリポット（15 cm程度）に花落ち部が隠れる程度に埋め込み、地温 25°C程度に管理する。

■施肥 根が広く張るので深耕し、追肥を多く施す。

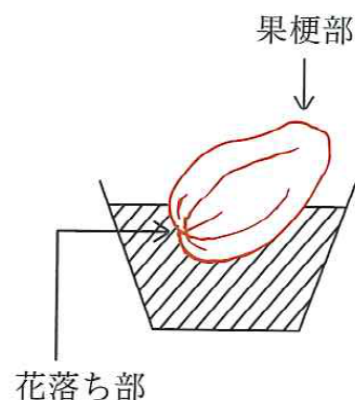
■定植 本葉 5~6 枚の苗を晩霜の心配がなくなった頃に定植する。定植前に植付け部分の周囲 1m程度を透明のポリマルチで覆い、地温を高めておく。うね幅・株間は 4×4mまたは 5×5m程度とする。初期生育は極めて遅いので防風保温のため、肥料の空袋などの回りを囲うようにすると良い。

施肥例

(a 当り)

植付けの方法

肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	300kg	—kg	基肥は植穴 1m 四方に施用。
苦土石灰	10	—	追肥は全面施用。
苦土重焼燐	3	—	成分量
CDU-S682 (16-8-12)	8	—	窒素 1.8kg
燐硝安加里 S604	—	4	燐酸 1.6 加里 1.8



■本畑管理

仕立て方法 地這い栽培もあるが、棚仕立が一般的である。1.5～1.7mの高さの棚を作り、これに這わせる。整枝には様々な方法があるが、一般的には主枝をそのまま伸ばし、はわせるときに、片側へ誘引する場合には1本、両側へ誘引する場合には2本仕立とする。

敷きわら 6月下旬になると地温が上昇するので、ポリマルチを除去し、敷きわらを行う。乾燥に強くないので、夏には時々かん水する。

追肥 秋に一斉に開花・結実するのでそれまでの間に十分に茎葉を展開させておくため、適宜追肥を行う。

防霜 霜に極めて弱く、1階の霜で茎葉が枯死するので、ハウス栽培など防霜地策をとる。

■病虫害 ベと病、つる枯病、アブラムシ、ハダニなどが発生するので発生初期に防除する。

■収穫 9月中旬頃から開花が始まり、開花後2～3週間で食用となる。かすづけなどにはやや大きくして開花後4週間程度たったものを用いる。また、翌年の種子用には開花後の日数が長く降下した果実が良いので、あらかじめ確保しておく。

■貯蔵 12℃以下で、凍結しない条件が保存のための条件となる。コンテナに乾いた籾がらを入れ、果実をパッキングしてハウス内など雨水の浸透しない土の中に埋め込んで貯蔵する。

ちよつと一服

はやとうりは熱帯アメリカ原産で、18世紀に世界中に広がりました。

原産地では果実を食用にするほか、多年生になるため根にたまるデンプンを食用にし、若芽も食用にしています。更につるを帽子、かごなどを編むのにも利用しています。

日本へは大正年間にアメリカから鹿児島へ導入されました。感じでは「隼人瓜」と書き、鹿児島の薩摩隼人にちなんだ名前です。